

(七) 綜藝種智院の式

空海は東寺の東側の隣地に、前中納言藤原三守（藤原南家、朝廷高官）から、二町余りの土地を譲り受け、そこに日本初の庶民の子弟のための私立学校「綜藝種智院」を開設した。天長五年（八二八）前後であっただろう。東寺に入ってからわずか五年の早さである。

この時代、私学校として淳和院・弘文院（和氣氏）・勸学院（藤原氏）・学館院（橘氏）・文章院（大江氏・菅原氏）・奨学院（在原氏）などがあったが、これは貴族一門の子弟のためのものであり、そこから有為の僧侶が育つことなどありえないことを空海は知っていた。私寺の高雄山寺や高野山で自分の弟子たちを育てながら、東寺や東大寺や大安寺や元興寺や興福寺といった官寺でさまざまな僧侶と交りながら、自分の密教の次代を担うべき青年僧侶はむしろ庶民の子弟であり、彼らを「綜藝種智院」において自分の手で薫育すべきだと確信したのであろう。

空海は、この学校に学ぶ庶民の子弟を、奈良の大学寮に学んだ若き日の自分（真魚）と大学寮を出奔して山林に伏し仏道を選んだ自分（仮名乞児）に重ねていたにちがいない。わが密教を担う僧侶のモデルを若き日の自分にたどったのだ。大学寮での諸学芸の勉強に秀で、その上で仏道を選択した若き日の空海こそ、まさに「綜藝種智」だったのである。

空海が「綜藝種智院」でやろうとしたことは、諸学芸と仏教の兼学であった。

その理を「立身出世の要諦も治世の道も、生死のこの世の苦を断ち涅槃のあの世に行くのも、この諸学芸兼学の道を捨てて誰も不可能である」とし、そしてその背景を「ところが、僧院の僧侶は仏教經典だけしか勉強をせず、大学の秀才は仏典以外の書を読みふけてばかりいて、儒・仏・道三教の道理や声明・工巧明・医方明・因明・内明の「五明」の学識など閉ざされたまま沈滞して通じ合わない。だから綜藝種智院を建てて広く三教をふくめた多様な碩学を招聘するのである」と言っている。

この諸学芸と仏教の兼学こそ空海の教育原理であり密教体系であった。空海の密教を受法しその法灯を将来守っていく者は、諸学芸に明るく仏教の学識にもすぐれていなければならぬ。仏教しか知らず、それで当然とするような坊主馬鹿であってはならないというのである。そのために、空海は仏道以外の世間の学術を教える教師と仏教の経論を教える教師を用意した。

空海はまた私学校の所以について、「京の都には大学が一つだけで勉学の塾がないため、貧しい庶民の子弟は勉強をしたくても場所がなく、(都より)遠方の勉強好きの子弟は通うのにも疲れてしまう。今こそこの一院を建てて学童を啓蒙したのである」と、庶民の子弟ためであることを強調している。

これを教育の機会均等とか民主教育の嚆矢とか戦後民主教育の思いつきで見るのは見

当ちがいである。そんな安っぽい人間中心主義は空海の心底になく、あるのは独自の密教思想だったからである。

例えば「綜芸種智院」という校名であるが、これは『大日経』『具縁品』にある「妙慧慈悲兼綜衆芸」からとっている。総合的に諸学芸を学ぶことが、人間に本来(種として)具っている仏智を引き出すのである。空海自身(の詩文・書法・語学・土木・薬品化学などの素養)がそうであったように、諸芸は単に世間の學術教養にとどまらず密教の修学に通ずる仏性の発露であり、仏性の萌芽を促す豊かな土壌だと空海は言いたかったのである。

さらに空海は、教師の心得として「三界の衆生はみなわが子」と思い、慈悲の心をもって、「忠孝」の思いを念頭に置き、貧富の差別をすることなく、適宜適切に、倦むことなく学童の訓育にあたるべきこととした。

最後に空海は、僧俗・師資を問わず学道を志す者には飲食物を(学校が無償で)支給すべきことを明らかにし、自分はもとより清貧に甘んじているから充分な用意はないのだが、とりあえず当面の工面はしたと言っている。このことから、空海は、この私学校も私寺の高雄山寺や高野山と同様、外部支援者の協力でまかなおうとしていたことがわかる。

今、東寺の東側慶賀門を出て大宮通を渡り、東寺通をまっすぐ東に進み、近鉄奈良線の高架橋の直前を左折してほどなくのところに、「綜芸藝種智院跡」の石碑と西福寺(浄土宗)

がある。しかし実際は、近鉄線の高架橋をなお東に行き、油小路通との広い交差点を右折してしばらくの左側にある九条弘道小学校が往時の敷地であつたらしい。

承和二年（八三五）に空海が入定し、右大臣になつた藤原三守も亡くなると、先生や学生たちの食事を無料の給食制とまでした日本初の私立学校は、一説によれば維持費の不足、一説によれば後継者不在のため、設立後二十年で廃止されることになつた。空海から東寺を託された高弟の實慧でさえ荷が重かつたのだろうか。

東寺別当となつた實慧は「綜芸種智院」を売却し、その代金で丹波大山莊四十四町百四十歩を当時の大納言藤原良房（藤原北家、冬嗣の子、後の太政大臣）から買い求め、東寺の伝法料（灌頂など密法を伝える法会等の実施に必要な資糧をまかなう墾田、のちの寺領莊園か）とした。

●本文・辭納言藤大卿 有左九條宅有 地餘貳町 屋則五間 東隣施藥慈院 西近眞
言仁祠 生休歸眞之原迫南 衣食出内之坊居北 涌泉水鏡而表裏 流水汎溢而左右
松竹風來琴箏 梅柳雨催錦繡 春鳥啣聲 鴻鴈于飛 熱渴臨也即除 清涼憩也即至
兌白虎大道 離朱雀小澤 緇素逍遙 何必山林 車馬往還 朝夕相續 貧道 有意
濟物 竊庶幾置三教院 一言吐響 千金即應 永捨券契 遠期冒地 不勞給孤之數
金 忽得勝軍之林泉 本願忽感 樹名曰綜藝種智院 試造式記曰

書き下し・辭納言藤大卿、左の九條に宅有り。地は貳町に餘り、屋は則ち五間なり 東は

施藥慈院に隣し、西は眞言の仁祠に近し。生休歸眞の原南に迫り、衣食出内の坊北に居

す。涌泉は水鏡にして表裏なり、流水は汎溢として左右なり。松竹の風來れば琴箏なり、

梅柳の雨催すれば錦繡なり。春鳥は啣聲あり、鴻鴈は于き飛ぶ。熱渴は臨むや即ち除

き、清涼は憩うや即ち至る。兌に白虎の大道あり、離に朱雀の小澤あり。緇素の逍遙何

ぞ必ず山林ならんや。車馬往還して朝夕相續す。貧道、意有りて物を濟す。竊に三教

の院を置くことを庶幾す。一言を吐き響けば千金即ち應ず。永く券契を捨て遠く冒地を期す。給孤の金を敷くを勞せず、忽ち勝軍の林泉を得たり。本願忽ち感ず。名を樹てて綜藝種智院と曰う。試みに式を造り記して曰く。

私訊・先の中納言藤原三守卿が左京九条の地に家を持っていて、その土地の広さは二町、家屋は五間（四方）で、東に貧窮の人や飢餓に病む人を收容し施薬治療を行う施薬院が隣接し、西には真言寺院の教王護国寺（東寺）が近くにあり、死者を葬る原がすぐ南にあり、衣食を貯蔵する朝廷の倉庫が北側にある。表と裏に湧水があつて水清く鏡のようであり、流れる水は右に左に溢れ出ている。松や竹に風が吹けば琴や箏のような音がし、梅や柳に雨が降れば錦織のような織り込みのようである。春には鳥たちのささえる音が聞こえ、（秋になると）大きな雁が飛来する。夏の暑気の渴きはそこに行くのと除かれ、清涼はそこに憩うとすぐに得られる。西側に長い道があつて白虎という神が守り、南側には小さな沢があつて朱雀という神が守っている。（それだから）出家僧侶と在家信者が遊歩するのに必ず山林でなければならぬことはない。車や馬が行き来して朝夕混雑する。拙僧は思うところあつて物事を成すのであるが、秘かに儒・仏・道の三教を教える学校を置くことを心から願っている。一言口にすれば大きな財が即応し（藤原三守の屋敷の寄進）、永く証文（世俗の商習慣）などは捨てて先々にサトリを期すのである。

祇園精舎の主・須達（スタッタ）長者は、その敷地として舎衛城の祇陀（ジェータ）太子所有の祇陀林を買うのに、敷地中に借しげもなくお金を敷きつめ、たちまち祇陀太子の林苑を手に入れたのだが、（私の場合）私の本懐に周囲がたちまち感応したのである。名づけて綜藝種智院と言う。試みに建学の精神を文にし記録して言うに、

※註記 1 .. 辭は、辞任した、先の、の意。

※註記 2 .. 納言は、ここでは中納言。

※註記 3 .. 藤は、藤原氏。藤原三守のこと。

※註記 4 .. 大卿は、大納言以下の官職の敬称。

※註記 5 .. 左は、京の左京。

※註記 6 .. 九條は、京の九条。

※註記 7 .. 施藥慈院は、施藥院。貧窮の人や飢餓に病む人を収容し施藥治療を行う治療院。

※註記 8 .. 仁祠は、寺院。

※註記 9 .. 生休歸眞原は、（煩惱に）生きることをやめて（大日の）眞実の世界に帰ること。

死ぬこと。ここは埋葬地・墓地。

※註記 10 .. 衣食出内坊は、衣食を貯蔵する朝廷の倉庫。

※註記 11 .. 汎溢は、あふれること。

※註記 12 .. 錦繡は、錦織のような織り込み。

※註記 13 .. 哢聲は、さえずりの声。

※註記 14 .. 鴻鴈は、大きな雁。

※註記 15 .. 熱渴は、暑気によるノドの渇き。

※註記 16 .. 兌は、八卦の兌。西の方角。

※註記 17 .. 離は、八卦の離。南の方角。

※註記 18 .. 白虎は、西方の守護神。『礼記』曲礼篇に、住宅の前後左右にある汗地（くぼ地）・丘・流水・長道に、それぞれ朱雀・玄武・白虎・青龍の四神を重ねる。

※註記 19 .. 朱雀は、南方の守護神、汗地（くぼ地）。

※註記 20 .. 緇素は、緇が出家が着る法衣の色黒、素が在家の法衣の白。出家と在家。

※註記 21 .. 貧道は、拙僧。私。

※註記 22 .. 三教は、儒・仏・道の三教。

※註記 23 .. 庶幾は、心から願う、の意。

※註記 24 .. 千金は、大きな財。

※註記 25 .. 券契は、証文。

※註記 26 .. 冒地は、前述。ボウチ (bodhi)、サトリ。

※註記 27 .. 給孤は、祇樹給孤独園（通称、祇園精舎）の主で、古代北インド・コーサラ国の首都・舎衛城（しゃえじょう、シユラーヴァステーシ *Sāvastī*）の長者・須達（スダッタ *Sudatta*）。須達長者は舎衛城の祇陀（ジエータ *Jeta*）太子から買うのに、その

敷地いっばいにお金を敷きつめたという。

※註記28…勝軍は、祇陀太子。

※註記29…式は、規則。

●本文…若夫 九流六藝 濟代之舟梁 十藏五明 利人之惟寶 故能 三世如来 兼
學而成大覺 十方賢聖 綜通而證遍知 未有 一味作美膳 片音調妙曲者也 立身
之要 治國之道 斷生死於伊陀 證涅槃於蜜多 弃此而誰

書き下し…若夫、もしはそれ九流六藝きゅうりゅうりくげいは代を濟すくうの舟梁しゅうりょう、十藏五明じゅうぞうごみょうは人を利するの惟れ寶な

り。故に能く、三世の如来は兼學して大覺を成じ、十方の賢聖けんじょうは綜すべ通へんちして遍知を證す。

未だ有らず、一味の美膳へんおんを作り、片音へんおんの妙曲かなを調かなでる者や。立身の要、治國の道、生死
を伊陀いたに斷ち、涅槃みを蜜多みに證す。此を弃すてて誰かあらん。

私訳…あるいは、そもそも、古代中国で言う九つの学派の教えと六つの教養・技芸は濟世
利民のための、舟で言えば、梁(強い構造材)であり、仏教の十のカテゴリーや五つの
學問は人を仏道に導く宝であろう。故によく、過去・現在・未來の如来は仏教と世俗の

学問を兼ね学んで確固たるサトリを成就し、十方の菩薩や菩薩地手前の修行者は仏教と世俗の学問を総合学習して遍き（サトリの）智慧を証得するのである。（しかし）五味のうちの一味で美味の食膳を作ったり、五音のうちの一音で美しい曲を奏でる人が未だいないのである。立身の要諦、あるいは国を治める道は、（世俗の）生死を（サトリの）彼岸において断ち、涅槃を彼岸において成就することで、このことを棄てて誰が（一即多が）できようか。

※註記1..若は、これを『三教指歸 性靈集』（岩波書店）のように「おもんみる（に）」と読むものか。私は「もしは」と読んだ。

※註記2..九流は、中国春秋戦国時代の学派。『漢書』藝文誌に言う、儒家・道家・陰陽家・法家・墨家・名家・縦横家・雑家・農家の九派。

※註記3..六藝は、古代中国で、皇帝の家臣で大夫の下の位の士以上が修めなければならない教養・技芸。『周礼』に言う礼（礼儀）・楽（音楽）・射（弓術）・御（馬術）・書（書道）・数（算術）の六種。

※註記4..代は、世。時代。

※註記5..舟梁は、舟の構造材の梁。

※註記6..十藏は、仏教の教法を分類化した十種の蔵。雑乱・器世界・地獄・餓鬼・畜生・人・天・声聞・菩薩・如来。

※註記7…五明は、古代の五種の学問。因明・内明・医方明・声明・工巧明。

※註記8…賢聖は、菩薩と菩薩地以前の修行者。

※註記9…遍知は、サトリの智慧。

※註記10…一味は、酸味・苦味・甘味・辛味・塩味の五味のうちの一つ。

※註記11…片音は、宮・商・角・微・羽の五音のうちの一つ。

※註記12…伊陀は、イター。波羅蜜多、パーラミター (paramita) の「イター ita」。敢えて訳せば「彼岸(に到達すること)」。

※註記13…蜜多は、ミター。波羅蜜多、パーラミター (paramita) の「ミター mita」。敢えて訳せば「彼岸(に到達すること)」。

●本文…是以 前來聖帝賢臣 建寺 置院 仰之弘道 雖然 毘訶方袍 偏翫佛經
槐序茂廉 空耽外書 至若三教之策 五明之簡 擁泥不通 肆建綜藝種智院 普藏
三教 招諸能者

書き下し…是を以つて、前來の聖帝賢臣は寺を建て院を置き、之を仰いで道を弘む。然り

と雖ども、毘訶の方袍は偏ひとえに佛經を翫もてあそび、槐序の茂廉は空もれんしく外書げしよに耽ふける。三教さくの策、

五明かんの簡かんの若かくに至いたつては、擁泥ようていして通とじず。肆ほしいままに綜藝種智院おきを建て、普おく三教おきを藏

め、諸の能者を招く。

私訳…従つて、わが国への仏教伝来の時の欽明天皇以後の天皇と朝廷の官職は寺院を建立して学問所を置き、これを尊重して仏道を広めた。しかしながら、(今の)寺院の僧侶はひたすら仏典をもてあそび、学問所の秀才やまじめな学徒も空しく仏教以外の書物を読み耽つている。儒・仏・道の三教の經典や書物、また五明の学の文献の如くに至つては泥でふさがれたように通じない(理解されない)のである。(だから)本懐のままに綜藝種智院を建て、広く三教の經典等を貯え、諸々の有能な先生を招くのである。

※註記1…前來は、わが国への仏教伝来の時の欽明天皇以後の天皇と朝廷の官職。

※註記2…毘訶は、毘訶羅。ビハーラ。寺院・僧院・精舎・住坊。

※註記3…方袍は、袈裟Ⅱ僧侶。

※註記4…槐序は、夏に花をつける槐(えんじゅ)にちなんで夏季のことを意味するが、他方、旧曆四月の別称でもある。ここは四月を転じて四月入学の学校ととる。

※註記5…茂廉は、茂が茂才、秀才。廉が清廉の士。

※註記6…外書は、仏教以外の書物。

※註記7…策は、古代の中国で、まだ紙に文を書く前の時代、文章や記録を書いた竹の札。

竹策。ここは転じて諸経・参考書。

※註記8…簡は、同じく木の札。木簡。同じく転じて諸経・参考書。

※註記9…擁泥は、泥でふさがれている様。

※註記10…肆(し)は、恣。欲しいまま。『三教指歸 性靈集』(岩波書店)のように、

肆(し)かるがゆえに、と読み下すものか。私は原意のように「欲しいまま」に読んだ。

●本文…所冀 三曜炳著 照昏夜於迷衢 五乘竝鑣 駟群鹿於覺苑 或難曰 然猶

事漏先覺 終未見其美 何者 備僕射之二教 石納言之芸亭 如此等院 竝皆有始

無終 人去跡穢 答 物之興廢必由人 人之昇沈定在道 大海資衆流 以致深 蘇

迷待積塵而爲高 大廈群材之所支持 元首股肱之所扶保 然則 多類者難竭 寡偶

者易傾 自然之理使然 今所願者 一人降恩 三公勳力 諸氏英貴 諸宗大德 與

我同志 百世成繼

書き下し…こいねが冀うところは、さんようへいちよ三曜炳著してこんや昏夜をめいく迷衢に照らし、くつわ五乘鑣を竝べて群鹿を覺

苑に駟らん。或いは難じて曰く。「然れども猶、せんがく事先覺の漏れて終に未だ其の美を見ず。

何となれば、びぼくや備僕射の二教、いそなごん石納言之芸亭、此の如く等の院、竝んで皆始有つて終り無

く、人去つて跡穢れたり」と。答うるに、「物の興廢は必ず人に由り、人の昇沈は定ん

で道に在る。大海は衆流を資として以て深きに致り、蘇迷は積塵を待つて高きを爲す。

大廈たいかは群材の支え持する所、元首げんしゅは股肱ここうの扶け保つ所なり。然れば則ち、類の多き者は

竭つきるきること難く、偶ぐうの寡すくなきの者は傾くこと易し。自然の理の然らしむるなり。今願う

所は、一人恩を降し、三公力を勳あわせ、諸氏の英貴えいき、諸宗の大徳、我と志を同じくし 百

世に繼ぐことを成さん」と。

私訳・願っていることは、儒・仏・道の三教が（世間に）広く知れ渡り、薄暮の薄明りを迷い道に照らし、菩薩・縁覚・声聞・天・人の五乗の修行者が並んで競い合い、衆生をサトリの苑に驅り立てることである。ある人は（これを）批判して言うだろう。「しかし、事は（なかなか容易ではなく）、先驅者らは必要なことが抜け落ち、とうとうその有終の美を見なかつた。どうしてかと言うと、右大臣吉備真備の儒・仏の二教や大納言石上宅嗣の芸亭院など、これらの学問所は皆始めはあつたが、終りはいつの間にかなくなり、人がいなくなつてその跡は汚れたままである」と。答えて言うに、「物事の興廃は必ず人にある、人の浮き沈みは決つて道にあるもの。大海原は多くの潮流をもととして深くなり、須弥山は塵が積もつて高くなつた。大きな家は多くの建材が支え保持す

るもの、国主は従臣が補佐して保つものである。であるから、同じ考えの人が多ければ尽きることはなく、同士仲間が少ない者は傾き易いのである。自然の理の然らしめるところである。今願っていることは、天皇が勅許を下し、太政大臣・左大臣・右大臣が力を合せ、朝廷貴族の英哲や仏教諸宗の大徳が私と志を同じくして、将来永くこれを継承していくことである」と。

※註記1…三曜は、日・月・星。ここは、日が仏教、月が道教、星が儒家。

※註記2…炳著は、きわめて明らかなこと。転じてよく知れ渡ること。

※註記3…昏夜は、日が暮れて夜になること。薄暮。薄明り。

※註記4…迷衢は、迷い道、迷いのちまた。

※註記5…五乗は、菩薩・縁覚・声聞・天・人。

※註記6…鑣は、馬具のくつわ。

※註記7…群鹿は、衆生。

※註記8…先覺は、先駆者。ここは石上宅嗣の私寺・阿闍寺内の芸亭院（公開図書館）や

吉備真備の儒・仏兼学（『私教類聚』）などのこと。

※註記9…漏は、手落ち、必要なことが抜け落ちること。

※註記10…備僕射は、備が吉備真備。僕射が中国の官位名で、日本でいう左大臣・右大臣。真備の場合最終官位が右大臣。

※註記 1 1 .. 二教は、儒家・仏教。

※註記 1 2 .. 石納言は、石上宅嗣。大納言。

※註記 1 3 .. 芸亭は、石上宅嗣が設置した公開図書館「芸亭（うんてい）院」。

※註記 1 4 .. 衆流は、多くの潮流。

※註記 1 5 .. 蘇迷は、前述。蘇迷盧（スメール Sumeru）、須弥山。

※註記 1 6 .. 大廈は、大きな家、立派な建物。

※註記 1 7 .. 元首は、国主、皇帝、天子。

※註記 1 8 .. 股肱は、前述。股と肘。転じて従臣。

※註記 1 9 .. 多類は、同じ考えの人が多いこと。

※註記 2 0 .. 寡偶は、仲間が少ないこと。

※註記 2 1 .. 一人は、この場合、天皇。

※註記 2 2 .. 降恩は、許可、裁可、勅許。

※註記 2 3 ..三公は、太政大臣・左大臣・右大臣。

※註記 2 4 .. 英貴は、身分の高い英哲。

※註記 2 5 .. 百世は、将来永く、の意。

● 本文 .. 難者曰 善也 或有人難曰 国家廣庠開庠序 勸勵諸藝 霹靂之下 蚊響何
益答 大唐城 坊々置閭塾 普教童稚 縣々開鄉學 廣導青衿 是故 才子滿城

藝士盈國 今是華城 但有一大學 無有閭塾 是故 貧賤子弟 無所問津 遠坊好事 往還多疲 今建此一院 普濟童蒙 不亦善乎

書き下し・難者曰く。「善きなり」と。或いは人有つて難じて曰く。「國家廣く庠序しやうじよを開

き諸藝を勧め勵ます。霹靂へきれきの下に蚊響ぶんきやう何の益あらん」と。答うるに、「大唐の城には、

坊々に閭塾りよじゆくを置いて普く童稚を教え、縣々に鄉學を開いて廣く青衿せいぎんを導く。是の故に、

才子城さいしに滿ち、藝士國に盈みてり。今是の華城けじやうには但だ一つの大學有つて、閭塾有ること

無し。是の故に、貧賤の子弟、津しんを問う所無く、遠坊の好事、往還するに疲多し。今此

の一院を建てて普く童蒙どうもウを濟わん。亦た善からざらんや。と。

私訊・その批判者が言うに「それで結構」と。また別な人が批判して言うに「國家は廣く學校を開設し、諸々の文芸を奨励している。雷鳴（國の學校）の下で蚊の鳴く声（私塾）がして何のためになるうか」と。答えて言うに「大唐の都城には条坊ごとに私塾を設置して廣く兒童を教え、各県には郷土の學校を開設して廣く学徒を教導している。である

から、英才が都城にいっぱいおり技芸の士が国中に満ちている。(しかし)現在のこの平安京にはたった一つしか大学寮がなく私塾はまったくなくない。従って、貧しくまた身分の低い家の子弟は仏教の教えを聞き質すところがない。遠い坊から通う学問は往復するの疲れが多い。今、この学問所を建設して広く学童を助けたい。また、結構ではないでしょうか」と。

※註記1…難者は、批判する人。

※註記2…庠序は、村里の学校。中国で、郷校(村里の学校)を周の時代に「庠」(まなびや)、殷の時代に「序」(学校)と言った。

※註記3…霹靂は、雷鳴、落雷。

※註記4…蚊響は、蚊の啼く声。

※註記5…坊々は、都城の条坊ごとに、の意。

※註記6…閭塾は、閭が村で、人の家での塾、私塾。

※註記7…坊々は、条里制の坊。坊ごとに、の意。

※註記8…青衿は、青い衿||学徒。

※註記9…華城は、平安京(『三教指歸 性霊集』(岩波書店))。

※註記10…津は、津梁。衆生を彼岸に渡す渡しと橋。転じて仏教の教え。

※註記11…遠坊は、遠い条坊、坪。村里。

※註記12…好事は、好いこと、喜ばしいこと、善い行い。ここでは学問（をする人）。
※註記13…童蒙は、学童。

●本文…難者曰 若能果如此 盡美盡善 與兩曜爭明 將二儀競久 益國之勝計 利
人之寶洲 余雖不敏 投一簣乎九仞 添涓塵乎八埏 報四恩之廣德 爲三點之良因
書き下し…難者曰わく。若し能く果して此くの如くなれば、美を盡し善を盡して、兩曜と

明を争い、二儀にぎと久しきを競う。國を益するの勝計しょうけい、人を利するの寶洲ほうしゅうなり」と。余、

不敏と雖ども、一簣いっきを九仞きゅうじんに投げ、涓塵けんじんを八埏はちえんに添え、四恩の廣徳に報じ、三點の良因
と爲さん。

私訳…批判する人が言うに「もし、そのようによく願いを達成したなら、美を尽くし善を
尽くして日（仏教）・月（儒家）とその明るさを争い、天と地とその久しさを競うもの
である。（それはすなわち）國に利益をもたらす勝れた計画であり、人を仏道に導く宝
珠（智慧）の島である」と。私は俊敏ではないが、モッコ一杯の最後の盛土を六十三尺
も高々と投げて積み、きわめて微小なしづくや塵を八方の果てに添えて、父母・衆生・
國王・三宝の四恩に報恩感謝し、法身・般若・解脱の三徳（＝涅槃）を得る良き基因と

したい。

※註記1…兩曜は、日（仏教）と月（儒家）

※註記2…二儀は、陰と陽、天と地。

※註記3…勝計は、勝れた計画。

※註記4…寶洲は、宝珠（智慧）の島。

※註記5…一簣九仞は、「簣」が土などを運ぶモッコ。「九仞」は一切が七尺。九仞もの高い山を築く時、最後のモッコ一杯の土を運べば完成するところ、そこで止めてしまえば完成しない。すなわち、長い努力も最後のわずかな失敗でムダになってしまう喩え。「書経」旅獒、「九仞の功を一簣に虧く」の故事）。

※註記6…涓塵は、しずくと塵

※註記7…八埏は、八方。

※註記8…四恩は、前述。父母・衆生・国王・三宝。

※註記9…三點は、前述。涅槃の内容の法身・般若・解脱の三徳。

● 本文…招師章

語曰 里仁爲美 擇不處仁 焉得知 又曰 遊於六藝 經云 初阿闍梨兼綜衆藝
論曰 菩薩爲成菩提 先於五明處求法 是故 善哉童子 巡百十城 尋五十師 常

啼菩薩 常哭一市 切求深法 然則 得智在仁者之處 成覺資五明之法 求法必於衆師之中 學道當在衣食之資 四者備而然後有功 是故 設斯四緣 利濟群生 雖云有處有法 若无師者 无由得解 故先請師 師有二種 一道 一俗 道所以傳佛經 俗所以弘外書 眞俗不離 我師雅言

書き下し・師を招く章

語に曰わく、「里は仁を美と爲す。擇んで仁に處らずんば焉んぞ知を得ん」。又曰わく、

「六藝に遊ぶ」と。經に云わく、「初に阿闍梨は衆藝を兼ね綜る」と。論に曰わく、「菩

薩は菩提を成ぜんが爲に、先ず五明の處に於いて法を求む」と。是の故に、善哉童子、

百十の城を巡り、五十の師を尋ね、常啼菩薩は常に一つの市に哭し、切に深法を求む。

然れば則ち、智を得るは仁者の處に在り、覺を成ずるは五明の法を資とす。法を求める

は必ず衆師の中においてし、道を學ぶは當に衣食の資に在り。四つのは備つて然る

後に功有り。是の故に、斯の四縁しえんを設けて群生ぐんじょうを利濟りさいす。處有り法有り　と云うと雖も、

若し師無くば、解げを得るに由なし。故に先ず師を請ず。師に二種有り。一は道、二は俗。

道は佛經ぶつぎょうを傳える所以、俗は外書げしよを弘むる所以なり。真俗離れずとは我が師の雅言がげんなり。

私訳・師を招く章

論語に言う。「村理では仁（思いやり）をもって美風としている。その村理を扱ひ住していながら仁に依拠しなければ、どうして道理を知ることができよう」と。また（論語に）言う。「礼（礼儀）・樂（音楽）・射（弓術）・御（馬術）・書（書道）・數（算術）の六芸に遊ぶ」と。『大日經』に言う。「阿闍梨になつた人もはじめは、多くの学芸を兼学し、それを総合する」と。『十地經論』第一に言う。「菩薩はサトリを成就するために、先ず五つの學問に身を置いて道理を学ぶ」と。従つて、『華嚴經』入法界品の「善哉童子は、百十の都城を巡礼して五十人の善知識をたずね、常啼菩薩はいつも市井にあつて濁世に迷う衆生に涙し、ひたすら深い空の理法を求めるのである。であるから、（五常の）智（道理を知ること）を得るためには（五常の）仁に徹する人のところにいるべきであり、サトリを成就するには五つの學問の道理を資けにすべきである。道理を求めるとは必ず多くの師匠の指導を仰ぎ、學問を学ぶことは衣食の資けがなければならぬである。

以上、四つの処・法・師・資は、はじめに十分備わればあとでよい結果が出るという例である。それで、この四つの縁を用意して衆生を仏道に導き済度するのである。処があり法があると言おうと言っても、もし師がいなければ解脱を得るのに方法がない。だから、師を招請するのである。師には二種あつて、一つは道、もう一つは俗である。道は仏教の経典を教え伝える所以であり、俗は仏教以外の書物を教え伝える所以である。真俗が離れないというのが私の師匠（恵果和尚）の格言である。

※註記1…語は、『論語』里仁篇。「子曰 里仁為美 挾不処仁 焉得知」

※註記2…六藝は、前述。礼（礼儀）・楽（音楽）・射（弓術）・御（馬術）・書（書道）・数（算術）。ここは『論語』述而篇の「志於道 挾於徳 依於仁 游於芸」か。

※註記3…經は、『大日經』具緣品の「初阿闍梨兼綜衆藝」。

※註記4…阿闍梨は、アーチャールヤ (acarya)、阿闍梨耶。軌範師、依止師。真言密教では伝法灌頂の大阿、もしくは伝法灌頂を履修した僧侶、伝法の師僧のこと。

※註記5…衆藝は、多くの学芸。『大日經疏』に、声論・因論・十八明処（四ヴェーダ・六論（六派哲学の聖典）ほか）・六十四能・算数・方藥・觀相・工巧などを言う。

※註記6…論は、『十地經論』第一に言う「菩薩於菩提 有五種障乃至五者無方便智障 不能善化衆生」。

※註記5…善哉童子は、『華嚴經』入法界品の主役。法を求めて五十三人の善知識をたず

ねる。

※註記6…常啼菩薩は、『大般若經』常啼菩薩品に説かれる菩薩。煩惱に生き濁世に迷う衆生にいつも涙している。

※註記7…仁者は、何事も仁の道に徹している人。

※註記8…衆師は、多くの師匠。先生・専門家。

※註記9…四縁は、処・法・師・資。

※註記10…群生は、衆生。

※註記11…解は、解脱。

※註記12…外書は、前述。仏教関係以外の書物。

※註記13…真俗は、仏典が説く真実の世界と衆生の煩惱に生きる迷いの俗世。

※註記14…雅言は、上品な言葉、洗練された言葉、正しい言葉。

●本文…一 道人傳受事

右顯密二教 僧意樂 兼通外書 任住俗士 有意樂學内經論者 法師心住四量四攝

不辭勞倦 莫看貴賤 隨宜指授

書き下し…一 道人傳受の事

右、顯密二教は僧の意樂いぎようなり。兼て外書に通ぜんには住俗じゆうぞくの士に任す。意に内の經論を

學ぶを樂ねがう者有らば、法師なり。心は四量四攝しりようししやうに住し、勞倦ろうけんヲ辭せず。貴賤を看ること莫なく、宜しきに隨しつて指授しじゆすべし。

私訳…一 道人傳受の事

右、顕密の二教は僧侶の志向である。兼学で仏教以外の書物に通じようとするなら在家の人材に教えてもらえばよい。仏教の經典や論書を學ぶ意向をもつのは僧侶であり、心は慈・悲・喜・捨の四無量心や布施・愛語・利行・同事の四摂法に住し、疲れや倦怠をいとわず、貴賤をいちいち調べることもなく、適宜適切に指南伝授してもらいたい。

※註記1…顯密は、顕教と密教。

※註記2…意樂は、意向、志向、心組み、思い、心性。

※註記3…内は、仏教。外は仏教以外。

※註記4…四量は、慈・悲・喜・捨の四無量心。

※註記5…四攝は、布施・愛語・利行・同事の四摂法。

※註記6…勞倦は、疲れていやになること。

※註記7…指授は、指南伝授。

●本文…一 俗博士教受事

右九經九流 三玄三史 七略七代 若文 若筆等書中 若音 若訓 或句讀 或通義
一部一帙 堪發童蒙者住 若道人意 樂外典者 茂士孝廉 隨宜傳授 若有青衿黃口
志學文書 絳帳先生 心住慈悲 思存忠孝 不論貴賤 不看貧富 隨宜提撕 誨人不
倦 三界吾子 大覺師吼 四海兄弟 將聖美談 不可不仰。
書き下し…一 俗の博士教受の事

右、九經九流、三玄三史、七略七代、若しは文、若しは筆等の書の中に、若しは音、若しは訓、或いは句讀し、或いは通義す。一部一帙、童蒙を發くに堪える者は住すべし。

若し道人の意、外典を樂う者は、茂士孝廉、宜しきに隨つて傳授すべし。若し青衿黃口の文書を志學する有らば、絳帳先生、心慈悲に住し、思忠孝を存して、貴賤を論ぜず、貧富を看ず、宜しきに隨つて提撕し、人を誨えて倦まされ。三界は吾が子というは大覺の師吼、四海は兄弟というは將聖ノ美談ナリ。仰がずんばある可からず。

私訳・右、『易経』・『書経』・『詩経』・『礼記』・『春秋左氏伝』・『孝経』・『論語』・『孟子』・『周礼』の九経、儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縦横家・雑家・農家の九流、『老子』・『莊子』・『周易』の三玄、『史記』・『漢書』・『後漢書』の三史、輯略・六芸略・諸子略・詩賦略・兵書略・術数略・方技略の七略、『宋書』・『齊書（南齊書）』・『晋書』・『梁書』・『陳書』・『周書』・『隋書』の七代は、もしくは詩歌で、もしくは銘賦のなかに、もしくは音で、もしくは訓で、あるいは句ごとに区切り、あるいは意味をとって読むのである。その一部であれ保護の覆いであれ、道理に暗い者を啓発するに堪える者はそれに住しなさい。もし、仏教の人で心に仏教以外の書物を読みたいと願う場合は、秀才・素直で清廉の人に、適宜適切に伝え受けさせなさい。もし、学徒児童で文献を学ぶことを志す者があれば、恩師の先生は、心は慈悲に住し、思いは忠孝に在って、貴賤を口にせず、貧富を詮索しないで、適宜適切に教え導き、人を教えるのに飽きることないようにしなさい。過去・現在・未来の三界に苦しむ衆生はわが子である、というのは釈尊の説法であり、四海（海内）は兄弟、というのは孔子の格言である。仰いで受け止めるべき言葉である。

※註記1..九経は、諸説あるが、一般に『易経』・『書経』・『詩経』・『礼記』・『春秋左氏伝』・『孝経』・『論語』・『孟子』・『周礼』。

※註記2..九流は、前述。儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縦横家・雑家・農家

の九思想学派。

※註記 3 .. 三玄は、『老子』・『莊子』・『周易』。

※註記 4 .. 三史は、諸説あるが、『史記』・『漢書』・『後漢書』。

※註記 5 .. 七略は、前漢末の学者劉向と劉歆親子による中国最初の総合図書目録。輯略・六芸略・諸子略・詩賦略・兵書略・術数略・方技略。

※註記 6 .. 七代は、唐以前の梁時代の私撰になる『宋書』・『齊書（南齊書）』ほか、唐以降に国撰で書かれた史書、『晋書』・『梁書』・『陳書』・『周書』・『隋書』。

※註記 7 .. 文は、詩歌。

※註記 8 .. 筆は、銘賦。

※註記 8 .. 句読は、句ごとに切って読む。

※註記 9 .. 通義は、意味が通じる。

※註記 10 .. 帙は、書物の保護カバー。

※註記 11 .. 童蒙は、幼くて道理に暗い者。

※註記 12 .. 茂士は、前述。秀才。

※註記 13 .. 孝廉は、素直で清廉であること。

※註記 14 .. 黄口は、若くて思慮分別に欠けること。

※註記 15 .. 絳帳は、赤い帳。転じて師の席、学者の書齋。転じて恩師。

※註記 16 .. 誨は、教える。

※註記17…三界は、前述。過去・現在・未來。

※註記18…大覺は、釈尊。

※註記18…師吼は、獅子吼・師子吼。ライオンが吼えること。転じて異教の徒が恐れをなすような釈尊の説教。説法。

※註記19…四海は、ここは海内、国内、あるいは国の周囲、の意。

※註記20…將聖は、すぐれた聖人。ここは孔子。

●本文…一 師資糧食事

夫人非懸瓠 孔丘格言 皆依食住 釋尊所談 然則 欲弘其道 必須飯其人 若道若俗 或師 或資 有心覺道者 竝皆須給 然雖乞道人 素事清貧 未辨資費 且入若干物 若有意益国利人 志求出迷證覺者 同捨涓塵 相濟此願 生々世々 同駕佛乘 共利群生 天長五年十二月十五日 大僧都空海記。
書き下し…一 師資糧食の事

夫れ、人は懸瓠けんこに非ず、とは孔丘こうきゆうの格言なり。皆、食に依つて住す、とは釋尊の所談なり。然れば則ち、其の道を弘めんと欲すれば、必ず須らく其の人に飯はんすべし。若しは道、若しは俗、或いは師、或いは資、心道を覺るに有る者は、竝びに皆須らく給すべし。

然りと雖も、道人素より清貧を事とし、未だ資費を辨ぜず。且く若干の物を入れ、若し

意に国を益し人を利すること有り、志して迷を出て覺を證することを求める者は、同じ

く消塵を捨てて此の願を相濟うべし。生々世々に、同じく佛乘に駕し、共に群生を利せ

ん。天長五年十二月十五日 大僧都空海記す。

私訳・一 師資糧食の事

そもそも、人は吊り下げられているひさご（食べられないウリ）ではない、というのは孔子の格言であり、皆、食物があつてこの世に住している、とは釈尊の談論である。従つて、その道その道を広げようと欲すれば、必ずその道の人に食事を提供すべきである。もしくはは出家、もしくはは在家、あるいは師匠、あるいは弟子、心が仏教の教えを覺ることにある人は、等しく皆全員食を受給すべきである。しかし、私空海はもとより清貧を戒めとし未だ費用が用意できていない。とりあえず若干の物を手し、もし心に国益・利人を思い、俗世の迷妄を出てサトリを得ることを志す人は、小異を捨ててこの願いを救つてほしいし、未來永劫、同じく仏教の教えによつて共に衆生を濟度していただきたいのである。天長五年十二月十五日 大僧都空海記す。

- ※註記 1 .. 懸瓠は、吊り下げられているひきこ（ウリ・ヒョウタン）。
- ※註記 2 .. 孔丘は、孔子。
- ※註記 3 .. 道人は、仏教僧。ここは空海自身。
- ※註記 4 .. 涓塵は、前述。しずくと塵。微小なもの。
- ※註記 5 .. 生々世々は、世を継いで永遠に、いつまでも、の意。
- ※註記 6 .. 群生は、前述。衆生。